

パネルディスカッション

「魅力ある世界都市へのプロセスと課題」

》》 パネリスト 《《

- | | |
|-------------|--------------------------|
| 青山 侑 氏 | 明治大学公共政策大学院 教授 |
| イエスパー・コール 氏 | ウィズダムツリージャパン株式会社 最高経営責任者 |
| 牧野 知弘 氏 | オラガ総研株式会社 代表取締役社長 |
| 吉本 光宏 | ニッセイ基礎研究所 研究理事 |

》》 コーディネーター 《《

- | | |
|--------|---------------------|
| 加藤 えり子 | ニッセイ基礎研究所 不動産運用調査室長 |
|--------|---------------------|

1——はじめに

■加藤 ニッセイ基礎研究所の加藤と申します。本日はどうぞよろしくお願ひいたします。それではパネルディスカッションに入りたいと思います。このパネルでは、魅力ある世界都市とは何か、そして訪日客4000万人を受け入れるにはどうしたらいいのか、そしてオリンピック・パラリンピックに向けて作りあげたものを2020年以降に向けてどう生かしていくのか、その取り組みについて皆さまのご見解を伺ってまいりたいと思います。

それでは、まずパネリストの皆さまをご紹介いたします。私の隣から、先ほど基調講演をしていただきました明治大学公共政策大学院教授の青山侑先生です。

■青山 青山です。よろしくお願ひします（拍手）。

■加藤 青山先生には、東京都で公共政策に携わられたご経験からお話を伺えればと思います。そのお隣がオラガ総研株式会社代表取締役社長の牧野知弘様です。

■牧野 牧野でございます。今日はどうぞよろしくお願ひいたします（拍手）。

■加藤 牧野様は大手不動産会社やコンサルティング会社に在籍したご経験を生かして、空き家問題や都市問題、インバウンドに関する著作を発表しておられます。本日は2020年に向けて都市がどうあるべきか、幅広い視点からお話しいただければと思います。そのお隣が、ウィズダムツリージャパン株式会社最高経営責任者のイエスパー・コール様です。

■コール Hello、よろしくお願ひします（拍手）。

■加藤 コール様はアメリカ大手投資銀行でチーフストラテジストとしてご活躍されておりました。本日は、日本を拠点とされている外国人として、そして長く日本経済を分析されていた視点からご発言いただければと思っております。そして、向かって右側がニッセイ基礎研究所研究理事の吉本光宏でございます。

■吉本 吉本です。どうぞよろしくお願ひいたします（拍手）。

■加藤 吉本は文化政策に関する調査研究や文化事業のコンサルティングに携わっております。オリンピックにおけるプログラムにも精通しておりますので、都市と文化の視点からコメントいただきたいと思ひます。

それでは早速、パネリストの皆さまから、それぞれのポスト2020に向けての視点からプレゼンテーションをお願ひしたいと思ひます。牧野様、まずお願ひいたします。

2——日本のインバウンド

■牧野 それでは私の方から、「ポスト2020、魅力ある世界都市」について、とりわけ今は日本全国のいろいろな都市に外国の方が増えてきていますので、訪日外国人の方々私たち日本人、あるいは日本の国がどういうふうに交わっていくのか、これからの日本の発展軸がどういったところにあるのかという点につきまして、簡単にご案内したいと思ひます。

今日は基調講演で、お隣の青山先生から、東京の今後の課題、あるいは魅力をどういうふうに出していくのかといったお話を拝聴いたしましたけれども、私も多くの不動産関係の仕事をしていまして常に感じるのは、都市の魅力あるいは都市の成長というものが、どうやら新陳代謝がきちんとできていることによって

生まれているということです。

つまり多くの人々が訪れたり住まったりする一方で、この都市からまた次の発展のステージを求めて出ていかれる方もいらっしゃいます。入ってくる人がいれば出ていく人もいます。この中で都市の魅力づくりができるのではないかと考えております。しかし、残念ながらわが国は、少子高齢化などと言われますけれども、青山先生の方からもご指摘いただいたとおり、人口の減少ばかりに目が行きがちです。しかし、実は東京の都市圏の中でも激しい高齢化の問題が避けて通れなくなっています。ポスト2020を考える中で、こんな課題があるわけです。

そんな中、この新陳代謝というキーワードについて考えると、私たちが東京の銀座や、ここの品川の通りを歩いているときによく目にする外国の方、お隣のコールさんなどもそうですけれども、こういった方々との連携、あるいは一緒にやっていくパワーが重要です。今日はそのことについて簡単にお話ししたいと思います。

皆さまご案内のとおり、訪日外国人の数は、当初の政府目標を2020年に2000万人としていたものが、昨年は既に1974万人でございます。今年も8月までの累計で既に、約2000万人だった昨年を25%ほど上回り、1600万人を超えてまいりました。こういった中で、政府は2020年の東京オリンピックの年に、訪日外国人を4000万人にしようという意欲的な目標を掲げました。

一方、日本の旅行者数、あるいは国際収支のデータを見ますと、日本から外国に出掛ける出国者の数を、外国から日本にやってくる入国者数（訪日外国人数）が上回るようになってきています。従って、国際旅行収支は、日本人が海外で使うお金に比べて、外国人が日本で使うお金が上回るようになりまして、昨年は久しぶりに1兆円を超える黒字という状況に相成っております。

今は海外のどんな国の方が日本に訪れているかという、皆さまご推察のとおりです。中国をはじめとした東アジア、あるいはタイ、シンガポール、マレーシアといった東南アジア、これらアジアの国々の人たちが訪日外国人の84%を占めています。

彼らの消費動向は、昨年で約3兆5000億円です。この急増ぶりはグラフで見ただくと分かるのとおり、2011年の東日本大震災をボトムに5年連続で急速に成長しております。今年は若干、為替の影響であるとか、後ほど出てくるように爆買いが少し収まったことで、消費に対する先行きを懸念する声もありますが、訪日外国人数は冒頭でご案内したとおり、どんどん増えております。そういった意味では、GDP500兆円に対する割合はまだまだ低いものの、訪日外国人の消費の影響というのは、東京のみならず今は日本全国で垣間見られるようになっています。

このうち宿泊の需要はどのくらいあるかといいますと、約4分の1相当の9000億円が宿泊の消費額になります。そういった意味で今後、地方経済あるいは日本経済全体の中で、ホテル業界や観光業界、あるいは小売業界に対する影響は無視できないレベルに成長してきております。

2—1. 量から質へ

今、申し上げましたとおり、外国の方が日本で大量に爆買いするようなことで、メディア等で盛んに話題になったのは昨年です。今年の手百百貨店等の発表によりますと、この爆買いが若干下火になったというお話も聞かれますが、一方で多くの外国人が東京や大阪あるいは京都のみならず、地方に直接周遊に出るようになってきております。

最近、旅行会社の方とお話する機会があったのですが、中国から日本に来られるお客さまの人気のツアーを聞きました。今までは東京の銀座あるいは新宿、秋葉原などに行って、大量にブランド品や化粧品といったものを買っていた方々が、徐々にリピーターが増えてきて、日本のおいしいもの、あるいは良い土産品を求めて地方を周遊するようになってきたそうです。

最近の中国人旅行客の人気ツアーナンバーワンは田植えだそうです。中国にも田んぼがたくさんあるのではないかと私も思うのですが、日本で田んぼに行って田植えをしたいという体験型ツアーが人気なのは、私は仕事で上海などへよく行くのですが、上海は東京に引けも取らぬ大都会だからです。ここで育った若い方や子どもたちは、日本の農村に来て田植えを体験するのが誠に楽しいということで喜々として田んぼに入っています。このように、以前では考えられなかったような観光の仕方が出てきております。

それから、アジアの地区は、皆さま方もあまり想像がつきにくいと思うのですが、富裕層の方が大変増えてきております。こういった富裕層の方々が日本に2度目、3度目の観光をするとなると、しばらく滞在して日本を楽しもうという動きも出てきます。今はどうしても、アジアから来られるお客さまは1~2泊で帰ってしまわれる方が多いのですが、今言ったように、地方に行って田植えをしたり、あるいは日本の秘境に行ってみたいということになれば、宿泊日数もプラス1泊、2泊という感じで、最終的に消費額の増加につながったり、消費内容がより高度化したりする効果が期待できるわけです。

このように、ここ数年で急速にインバウンドが増えてきた日本ですが、世界的に見て日本のインバウンドの数がどのぐらいの位置にあるか、2014年のデータで世界順位を見ると、日本はまだまだインバウンドの後進国であります。2014年現在、外国人訪問者数は世界22番目です。ちなみにトップはフランスの8300万人超であります。アジアでは中国の5500万人、あるいは香港、マレーシア、タイといったところが日本よりも多くの観光客を集めています。

先ほどご案内しましたとおり、日本のインバウンドはアジアからが多く、欧米からは少ないというふうによく言われます。これは地政学的にアメリカやヨーロッパから日本に来づらからではないかと言う方もいらっしゃいますが、そんなことはありません。実はタイなどを調べますと、欧米からたくさんいらっしゃいます。隣にいらっしゃるコールさんがまだまだ普通でない人と思っていると、日本は駄目です。もっと欧米にとって魅力的な国になるためには、日本の観光資源であるとかインフラというものを、今後もっともっと整えてあげることが必要なのではないかと感じています。

今日の基調講演で青山先生からもご指摘いただいたとおり、羽田空港は滑走路が4本なのに鉄道が2本しかないというのは、目からうろこだったのですが、もっと外国人が旅行しやすい整備の仕方もあるのではないのでしょうか。

2-2. インバウンドの受け皿

インバウンドは2020年の東京五輪までではないかとおっしゃる方もいらっしゃいます。これも少し意見が違うのではないかと考えております。なぜなら、今は2000万人の外国人が東京にいらっしゃいますが、まだオリンピックは開かれておりません。さらに、これはJETROのデータなのですが、2020年に向けて中間所得層と呼ばれる教育やサービス、旅行にいそしむ方の人口が、中国では現在の3億人から6億人、ASEANでは1億人から1億8000万人に伸びるだろうと予想されています。

日本はだんだん高齢化してしまっていて、高齢化するとなかなか旅行してくれないという一方、少し目を移す

と私たちの国の外側では、日本に旅行できる方がたくさん増えてきているわけです。

そういった意味では、わが国では今後、MICEといわれるような会議場の施設であるとか、大型の観光施設を伴った大型の施設といったものを、東京あるいは大阪といった所にもっと整備する必要があるのではないかと考えております。

一方、これだけの数のお客さん、2020年で4000万人を受け入れることを考えれば考えるほど、羽田や成田、関空だけでなく地方空港が大きな威力を発揮してきます。実は日本国内に空港は97もございます。

今、この地方空港に外国から直接、飛行機がやってくるような仕掛けをすることによって、4000万人あるいは2030年の6000万人という目標をぜひ達成しようではありませんか。

一方、もう一つの玄関口が港であります。このパネルにありますとおり、大型の客船が日本に続々やってきました。昨年、クルーズ船によって日本にやってきた数は110万人を超えました。政府の目標では2020年に500万人を目指しております。

実は、クルーズ船は大変な威力を持っております。日本が誇る豪華客船の飛鳥IIはわずかに5万t、日本にやってくる最大の客船Queen Mary2はその3倍の15万t、2500人のお客さんが一斉に港に降りてきます。この方々は、1人当たり1回の寄港で3万~4万円をお使いになるそうですので、1回の寄港で何と1億円のお金を港に落としていきます。現代の宝船といってよいのではないのでしょうか。

私は、こういった方々がこれから日本の地方で旅行されるときに有力な切り札になるのが民泊であろうと思っています。民泊は、都市で行う場合には既存のホテル・旅館との軋轢も多いのですが、逆に今、地方は大型の旅館あるいはホテルが代替わりできず、続々と廃業しています。

そんな中、日本の民家であるとか、空き家になってしまったところをどんどん民泊に利用して、外国の方でも気楽に地方の山奥や海のふちを訪れていただければ、こんな活用の仕方も考えられるのではないかと思います。

一方、日本では外国人留学生の方がますます増えています。

例えば別府の立命館アジア太平洋大学であるとか、秋田の国際教養大といった優秀なアジアの留学生をたくさん輩出している学校が出てきているので、日本で若者が少ないのであれば、どんどん外国から若者に来ていただいて、日本でもっと仕事をしてもらうような作戦も有効かと思っています。

2—3. 陸海空をゲートウェイに

さらに、中国、アジアのみならず、欧米からも富裕層を引き付けられるような超高級リゾートであるとか、日本は水面の多い国ですので、交通機関も例えば水上飛行機などを使って通勤で運んであげるといった発想も求められるわけであります。

日本は今までは大変恵まれた国でした。わが国の人口は戦後どんどん増え、1億人を超えました。そんな中、田中角栄さんではありませんが、新幹線、鉄道、高速道路といったものが日本の発展を支えてきました。

ところが、これからの日本が外国人を迎え入れようとするならば、これに加えて空である空港、海である港のゲートウェイを整備することによって、陸海空の三軍体制でわが国の第2の開国ともいべき外国の方々のゲートウェイを作ってみてはいかがでしょうか。

私が冒頭で申し上げたように、都市の活力は新陳代謝にあるので、陸海空を整備することによって外国

の方が大勢いらっしゃるようになり、日本全体の新陳代謝につながればと思って、私の最初のご提案とさせていただきますと思いました。ありがとうございます (拍手)。